

International Conference : Heritage in Asia (国際学会 : アジアの文化遺産)

石本 倫子

1、学会の概要

2009年1月8日から10日まで、シンガポール国立大学アジア研究所 (Asia Research Institute) 主催の国際学会「アジアの文化遺産」(International Conference Heritage in Asia : Converging Forces, Conflicting Values) に参加した。

学会は「アジアの文化遺産を再考する」という開催主旨のもと、テーマとしては1) 国際都市空間における文化遺産、2) 文化遺産の再構築と調和、3) 経済的側面、4) 多様性、5) 近代性がとりあげられ、初日の開会講演から最終日の総括コメントまで、4本の基調講演のほか、5つの部会で約75の報告が行なわれた。

連日、午前には1部、昼食をはさんで午後は2部の3部構成をとり、午前と午後にそれぞれ軽食付きの休憩時間 (tea break) が持たれた。また、最終日にはオプションとして3コースの中から選べる遠足 (excursion) と夕食会 (conference dinner) が準備されており、会期中を通して交流を深める機会が多

く設けられていた。

報告者は東南アジア、オーストラリアをはじめ、日本やヨーロッパからの参加者も見られ、会場は常にmultinationalな雰囲気であった。また、出身はシンガポール、研究対象はマカオ、研究拠点は香港とニュージーランドというように、まさに母国や母国語を超えたinternationalでcross-culturalな研究の実践者に多く出会うこととなった。

2、報告のなかから

個別報告は、人類学、民族学、考古学のほか、言語学、文学、政治学、地理学、比較文化学、社会学、映像、建築、工芸、空間デザイン、遺跡保存など、実に多様な専門分野からなされた。歴史学では馴染みの少ない概念や方法論に接したことは大きな収穫であった。

その一つがpeacebuildingという概念である。Bright Brauchler氏 (フランクフルト大学) の報告では、紛争地域であるルワンダ、東ティモール、モルッカ諸島の事例から、紛争後の地域再生における文化遺産の重要性が述べられた。

バーミヤン石仏のように有形 (tangible) の歴史的建造物が破壊された場合は、その再建についての関心は払われやすい。しかし、戦禍によって失われるものは形あるものだけではない。社会構造や伝統的な司法機構などがその例であるが、それらを正しく理解したうえで適切に修復が施されなければ、新たな軋轢を引き起こしかねない。逆にそういった無形 (intangible) の文化遺産を守るための活動が草の根レベルで着実に行なわれれば、それこそが平和秩序の形成 (peacebuilding) へとつながる。以上が氏の報告の骨子である。



休憩時間の風景

ここで焦点となった無形文化遺産の事例は、Pitipong Yodomongkon氏（チェンマイ大学）の報告で扱われたtraditional knowledgeに共通するものがある。ある特定の地域社会で受け継がれている慣習や、共有されている知識を、人材、組織、相互関係、社会構造を含めたintellectual capitalと捉え、それらが適切に機能するプロセス全体が地域発展に寄与するという。両報告ともに、排他性や一極集中化といった文化遺産の持つ負の局面への目配りをしたうえで、地域の繁栄を実現する具体的なアプローチを提案していた。

また、Chin Ee Ong氏の報告では、文化遺産と銘打ったtourismの影で多くの産業が失われ、一つの産業がなくなるとそれに関わる生活史だけでなく階級史も失われることを指摘した。先のpeacebuildingでは文化遺産をpost-conflictの問題として捉えていたが、ここでは、まさしく文化遺産をpost-colonialの問題として捉えており、「何を文化遺産とするか」という段階から一歩進んで、現実的な問題を解決しようという使命感が感じられた。



アジア研究所のリーフレット

3、シンガポールで感じたこと

tangible/intangibleは、学会全体を通して潜在的なキーワードとなっていたが、「有形／無形」という日本語訳に比べて、より直截に「触知可能か否か」という概念として把握されているような印象を受けた。

概念と言えば、heritageという言葉を翻訳せずに直接扱っている点は海外の研究における強みであろう。本来heritageには文化的遺産という意味が含まれているが、日本で文化遺産という場合にはcultural heritageとしなければ馴染まない。実際に

シンガポールでは、日本ならば「マレー博物館」とするところが「Malay Heritage Center」であり、中華街のコミュニティセンターは「Chinatown Heritage Center」であって、研究の充実度とは別の問題であるとはいえ、heritage用語使用に関しての成熟度を感じた。

よく言われることであるが、シンガポールは創出された統合国家であり、その過程で衰退を余儀なくされたエスニシティの復活が、いま叫ばれている。シンガポールには純血種のシンガポール民族はいない。しかし独自の文化を持つ中国系グループであるプラナカンはそのハイブリッドさゆえに最も「シンガポールらしさ」を体現するエスニックグループであり、このプラナカンの存在は今回の学会のテーマでもあったReconciliation（調和）を体現したものではないかと考えた。

学会を主催したシンガポール国立大学アジア研究所（ARI）は、「located at one of its communication hubs」と謳っており、シンガポールという国家の立場性を自覚して実践的な研究活動を行なっていると感じた。



アジア研究所の「難波渦」